

---

# 死に損ね

るうね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死に損ね

### 【Nコード】

N38590

### 【作者名】

るつね

### 【あらすじ】

かつて切腹し、奇跡的に命を取り留めた原田左之助。だが、その時から彼は……。

### 【完結】

## 第一話

心地よい陽気だった。春が近い。

暖かい日差しの降り注ぐ川原の土手に、左之助は寝ころんでいた。口に木の小枝を咥え、腕を枕に目を閉じている。睡魔が、とろとろと意識を侵食しつつあった。川原で遊んでいる子供たちの声が、少しずつ遠くなる。

「左之助」

呼ぶ声に、目を開ける。永倉新八が土手を下りてくるところだった。

「ここにいたのか」

左之助は身を起こして枝を吐き捨てると、大きく伸びをした。

「いい日和だったんでな。日差しに誘われるまま、ついふらふらと」  
「いくら暖かいと言っても、こんなところで寝ていたら風邪をひくぞ」

「風邪なんて、ひき方を忘れちゃったよ」

そう嘯いて、にやりと笑う。永倉も笑った。

「で、何か用か」

「うむ」

永倉はうなずく。うなずいてから、黙り込んだ。

左之助は、待った。

ようやく、永倉が口を開く。

「浪士組のことなんだが」

やはりそれか、と左之助は思った。

浪士組。近々、上洛する將軍家茂を警護するため、江戸周辺の浪士を募って結成された組織だ。これに、左之助や永倉が食客として世話になっている試衛館の面々も参加することになっていた。

「臆病風にでも吹かれたのか、新八」

京都では、過激な尊王攘夷派が「天誅」と称して佐幕派の人間を

斬って回っているという。將軍警護に当たる浪士組は、当然、その標的になるだろう。

むろん左之助は、永倉が臆しているなどとは露ほども思っていない。案の定、永倉は怒りの表情を浮かべた。

「臆してなどいない！」

「じゃあ、何だよ」

「……清河のことだ」

「清河八郎か」

浪士組のことを幕府に建策した人物であり、その経緯から浪士組の幹部にもなっていた。

「奴は信用できると思うか」

「さあなあ」

左之助は顎を掻く。

清河の姿は一度見かけたことがあるが、小狡こたねそうな男だ、ぐらいの印象しかなかった。永倉は、違う印象を持ったらしい。そういう点、左之助よりも永倉の方が鋭い。

「どうも、あの男は腹に一物あるような気がしてならないのだ」

「じゃあ、今から近藤さんたちを止めるか？」

「できるわけないだろう。幕臣に取り立てられる絶好の機会だと、あれほど喜んでいるものを」

「なら、俺たちはあの人についていくしかないだろうよ」

永倉は、考えすぎる。考えても仕方ないことまで、思い悩む癖がある。これが剣のことになると、あれほど果断になるのだから、分らないものだ。

永倉は不承不承うなずいた。

「ま、俺の槍やお前の剣の腕を活かせるのは間違いないからうぜ。少なくとも、こんな片田舎で燻くすぶっているよりはな」

それに、あるいは。

京に行けば、死に場所が見つかるかもしれない。死ぬことが、できるかもしれない。

左之助は、無意識に左の胸に手をやっていた。そこにあるはずの鼓動は、やはり感じられなかった。

永倉の危惧は当たった。浪士組が京に着くと、清河は態度を一変させたのだ。

「我ら、浪士組の本当の目的は、朝廷の名のもとに攘夷を決行することにある」

つまりは、尊王攘夷の急先鋒になるということであり、尊攘過激派から將軍を警護する、という当初の目的とは真逆であった。

これに、近藤が反対した。そうすると、自然、左之助も反対派ということになる。近藤の意見は、試衛館に属する者の総意とみなされた。実のところ、左之助にとってはどうでもよかった。組織の論理など、自分の関知するところではない。自分にできることは、槍を振るうことだけだ。

永倉は、また悩んでいるようだった。

「清河は江戸へ帰るらしい」

「へえ」

「近藤さんは京に残ると言っているが、一度、我らも江戸に帰った方がいいのではないか」

「江戸へねえ」

左之助の気のない相づちに、永倉が気色ばむ。

「真面目な話だ。この人数では、將軍の警護や京の治安回復など難しいだろう」

浪士組のほとんどは、清河に従って江戸に帰還することになっていた。自己の属する組織の主義主張などどうでもいいという連中。どちらかと言えば、左之助の価値観も、彼らのそれと近い。意思決定は大将がやればいいことで、下の者はそれに従っていればいいのだ。何より楽である。

永倉はそうは思わないらしい。

「京に残るのは、我らと芹沢鴨の一派を含めて二十数人。これでも何が為せるというのだ。今は江戸へ戻り、再び機を待つのが得策ではないかと思うのだが」

「近藤さんに、そう進言したらどうだ」

「聞くわけないだろう、あの人が」

こうと決めたら、ここでも動かない。それが近藤である。

「まあ、なるようになるさ」

左之助は笑う。永倉は、まだ難しい顔をしている。

結局、近藤らは会津藩松平肥後守御預りとなり、市中警護の任に当たることになった。

壬生浪士組。みぶろうしぐみそう名乗った。

## 第二話

左之助の槍の穂先が、相手の喉笛に吸い込まれていった。相手は驚いたような表情を浮かべている。そのまま目から光が失われていった。左之助が槍を抜くと、その身体はゆっくりと前のめりに倒れた。

月明かりの下、左之助は、もう一度、相手の顔を眺めた。新見錦。芹沢一派で壬生浪士組の副長である。それを、暗殺した。京都に来てからは、初めての殺しだった。

「見事だ、原田」

闇の中から、土方が歩み出てくる。

「死体を屯所まで運ぶぞ」

局中法度に違反したため切腹。新見の死因を、そのように偽装するのだろう。

権力闘争、であった。近藤勇と芹沢鴨。どちらも、一代の傑物である。両雄並び立たず、とはよく言ったものだ。頭が二つある蛇は、どちらか一方がもう片方に喰われるしかない。近藤派と芹沢派の権力闘争は、日に日に激化していた。先月には、試衛館の生え抜きでこそないものの、近藤に近しかった佐伯又三郎という隊士が、芹沢派に暗殺されている。

土方とともに新見の死体を屯所へ運んだ後、左之助は井戸の水で身体を洗った。返り血は浴びていなかったが、そうしたい気分だったのだ。そうするのが礼儀だという気もした。

腹の古傷を触る。切腹の痕。

左之助が切腹したのは、安政五年（一八五八年）、十九歳の時だった。当時、左之助は伊予松山藩の中間として、江戸の松山藩中屋敷で生活していた。きっかけは、上官との喧嘩だった。理由は覚えていない。多分、くだらないことだったのだろう。その喧嘩の最中、相手に「腹を切る作法も知らぬ下司め」と罵られ、ならばとその場

で腹を切つてみせた。それからの記憶ははっきりしない。覚えているのは、血の赤。腹から夥しく出血し、口からも血を吐いた。全ての感覚が遠のき、まるで別の世界の出来事を見ているようだった。死んだ、と思った。

しかし、左之助は死ななかった。奇跡的に命を取り留めたのである。だが、その時から――。

左之助の手が無意識に左胸に伸びる。左之助は頭を振り、井戸の水を頭から被った。

二日後、近藤から芹沢暗殺の命が下った。芹沢は新見が近藤の手に暗殺されたのだと主張し、下手人を差し出すよう申し入れてきたのである。事ここに至つては、小細工は無意味だ。芹沢と近藤どちらかが倒れるまで決着しないだろう。

暗殺の実行者として選ばれたのは、左之助の他、土方と沖田、そして山南。いずれも一騎当千の猛者である。

永倉は選ばれなかった。多分、彼の気性を考えてのことだろう、と左之助は思った。剣の腕で他の者に劣りはしないが、暗殺に向く気性ではない。

決行は、九月十八日と決まった。

九月十八日は雨だった。暗殺には絶好の機である。少々の物音なら、雨の音がかき消してくれる。

左之助たちは、芹沢たちが寝静まった頃を見計らい、芹沢派の定宿である八木源之丞屋敷に踏み込んだ。

待たれていた。

屋内に踏み込んだ瞬間、左之助は悟った。平山と平間が刀を抜き、こちらに向かつて構えていた。いきなり襲いかかってくる。土方と沖田が、それを受けた。左之助は加勢しようとしたが、廊下が狭く思うようにいかない。加えて、平山も平間も互いの相手を壁にして、同時に襲いかかれないよう上手く立ち回っていた。さすがに、二人

とも並みの剣客ではない。山南も手を出しあぐねている。

「山南、原田、芹沢を！」

平山と斬り結びながら、土方が叫ぶ。

左之助は、いったん外に出て、縁側から再び屋内に入り、芹沢の寝所を目指した。後ろに山南も付いてくる。芹沢の寝所の前まで来て、山南と二人、顔を見合わせうなずき合った。

<sup>ふすま</sup>襖を開けようとしたその時、いきなり中から襖が開いた。飛び出してくる人影。山南が刀を抜きはらい、その人影に向けて斬りつけた。女の悲鳴。その声が消えるか消えないかのうちに、もう一人、中から飛び出してくる。芹沢だった。刀を振るった恰好のままでいた山南に斬りつける。山南の肩から、血が迸<sup>ほとばし</sup>った。追撃を加えようとした芹沢に向けて、左之助は槍を繰り出した。刀の峰で弾かれ、軌道をそらされる。左之助の腕に鈍い痺<sup>しび</sup>れが走った。

強い。

芹沢は、山南を無視する形で、左之助に向けて低く構えた。山南は肩を押さえて、うずくまっている。命に別状はなさそうだが、剣は振るえまい。

左之助は、床に倒れている人影を見やった。山南が斬りつけた人影である。芹沢の愛妾<sup>あいせつ</sup>、お梅だった。すでに絶命している。

「ずいぶん、酷いことをするじゃねえか」

芹沢はお梅を囚にしたのだ。多分、お梅は自分がなぜ斬られたのか理解できなかったに違いない。

芹沢は無言。その目だけが殺意に燃えている。

左之助は、腰を落とし、構えを取った。しばし、睨み合う。少しずつ、左之助の槍の穂先が揺れ出した。顎から汗がしたたる。芹沢に変化はない。

踏み込みたい。左之助の胸中に、焦燥に似た思いが去来する。踏み込めば、この圧迫感から逃れることができる。楽になれる。そう思った時には、すでに踏み込んでいた。突き出した槍が、あっさりとかわされる。芹沢の突きが来た。冷たいはずの刀身が、熱

を持つて、腹から背中まで貫いていった。勝利を確信したか、芹沢の口の端が笑みの形に歪む。

——左之助も、笑っていた。

槍を捨て、芹沢の眼窩<sup>がんか</sup>に抜き手を見舞う。芹沢の悲鳴が上がった。左之助は腹から刀を抜くと、芹沢の喉を突いた。どう、と芹沢はその場に倒れ伏す。二、三度、痙攣<sup>けいれん</sup>していたが、それもすぐ止まった。「悪いな」

乾いた口調で、左之助は言う。

「死ねねえのさ、俺は」

切腹した、あの日から。

腹に受けた傷は、すでにふさがりつつあった。左胸に手をやる。

鼓動は、ない。

呆然とした山南の視線を感じつつ、左之助は自嘲めいた笑みを浮かべた。

### 第三話

「原田君」

屯所の廊下で、左之助は山南に呼び止められた。

芹沢暗殺から、数日が経っている。あの日以来、山南は何か思いつめた様子だった。その原因が自分にあることには、左之助も気づいていた。

「例の……君が芹沢に斬られた時のことなのだが」

山南の表情には恐怖がある。理解できないもの、未知のものに対する恐怖。当然の反応だな、と左之助は思った。

「あの時、言った通りですよ」

左之助は肩をすくめる。

「俺は死なない。いや、死ねないんです。以前、死に損ねてから、死に方を忘れちゃいましたね」

「そんな、まさか」

呆然とつぶやく山南の手を取り、左之助は自分の左胸に押し当てた。山南の表情が凍りついた。

「ないでしょう、鼓動が」

左之助は山南の手を離す。あわてて、山南は手を引いた。穢<sup>けが</sup>れにでも触れたかのように、青ざめた顔で左之助と距離を取る。

「当然の反応ですな」

左之助は苦笑を漏らした。

「でもまあ、他の人には黙っていてもらえませんかね。いろいろとやりにくくなるんで。もっとも、誰かに話したところで、信じるとは思えません。心配しなくとも、妙な真似はしませんよ。死ねないだけで、あとはいたって普通の人間です」

そう言って、左之助は山南に背を向けた。

「頼みますよ」

山南の返事はない。背中に感じる視線が、恐怖と嫌悪を孕<sup>はら</sup>んでい

た。

その数日後、左之助は暗殺者に襲われた。

襲撃者は三人だった。御倉伊勢武、荒木田左馬之助、楠小十郎。いずれも、山南の子飼いである。

嫌われたものだ。左之助は苦笑する。山南には、自分が化け物とは思えないのだろう。無理もない、という気はする。

左之助は無手であった。試衛館にいた頃と同じように、時々、ぶらつと散歩に出かけたくなる。そんな時、槍は邪魔だ。無粋である。とはいえ、無用心であることは否定できない。

三人は抜刀し、左之助を取り囲んでいた。逃げようにも、隙がない。さすがに、山南が暗殺を任せただけあって、腕はたしかである。「どうした、来いよ」

挑発にも乗ってこない。じりじりと、包囲の輪を狭めてくる。

正面に立った荒木田が斬りかかってきた。左之助は身をひねってかわす。かわしたところを、別の一人に脇から突かれた。激痛に、思わず身を折る。一斉に攻撃が来た。首、腕、腹。瞬く間に、血みどろになる。自身が作った血だまりの中に、左之助は倒れ込んだ。三人の交わす言葉が、ひどく遠くから聞こえてくる。

「殺ったか？」

「ああ。さすがにこの傷で生きているわけがあるまい」

「山南先生は、首を討てとおっしゃっていたが」

そういえば、首を斬り落とされたことはない。落とされれば、死ぬだろうか。

「よし、斬るぞ。支えていてくれ」

上半身を抱えられ、身を起こされた。次の瞬間、気声とともに首筋を刃風が通り抜けていった。一瞬、視界が暗くなる。これが、死だろうか。ぼんやりと、考える。

だが、まだ手足は動かせた。少なくとも、そのような感覚はあつ

た。腕や腹に負った傷も、癒え始めている。視界が数回明滅した後、再び明るくなった。視界の端に、倒れている自分の身体が見えた。首がない。我が事ながら、気味悪さを通り越して、滑稽こっけいですらあった。三人は、各々、刀を鞘さやに収め、立ち去ろうとしている。

左之助は、ゆつくりと立ち上がった。

「な」

声上がる。

「し、死体が」

左之助は首を拾い上げ、胴体の上に乘せた。すぐに傷がふさがり、元通りになる。

「さて、続きをやるうか」

そう言つと、左之助は自失している三人に向かつて、地を蹴った。三人が刀の柄に手をかける。逃げようとしなのは勇敢だが、この場合は無用の勇氣だった。刀を抜く前に肉薄し、荒木田の水月みそおちを思い切り蹴りあげる。爪先から、何かが潰れるような感触が伝わってきた。白目を向いて倒れる荒木田には構わず、ようやく抜刀した御倉の秘中（喉仏の下の窪み）に手刀を突き入れた。御倉の全身から力が失せていく。その手から、左之助は刀を奪った。

「ひ、ひいつ」

楠小十郎が背を見せて逃げ出した。何をどう考えたのか、近くの水菜畑に足を踏み入れる。柔らかい土に足を取られて転倒した楠に、左之助はゆつくりと近づいていく。

「く、来るな、来るなつ、化物」

「傷つくねえ。まあ、本当のことだから反論もできねえが」

楠が、遮しへり二無にむ二、刀を振るってくる。それを、左之助は手にした刀で巻き上げるように弾き飛ばした。刀は得手ではないが、これぐらの芸当はできる。恐怖に目を見開いた楠の首を、一閃。半ばまで斬り裂かれた楠の首から、鮮血が噴き出した。

楠の身体が地に倒れ込むのも待たず、左之助は刀を放り捨て、歩き出す。勝ったという実感はない。事実、一回、首を落とされてい

る。死なない肉体。殺し合いにおいて、これほど強力で、これほど卑怯な武器はないだろう。左之助にとっては、命を賭けた真剣勝負をすることは不可能なのだ。それは武辺者としての死を意味する。左之助は生きながらに、死んでいた。

途中の井戸で、返り血と自分の血を洗い流した。衣服についた血までは落とせないが、まあ何とでも説明はつくだろう。

屯所に帰りつくと、入り口に山南が立っていた。左之助の姿を認めると、青い顔で中に引っこまうとする。

「待てよ、山南さん」

声と殺意で、山南を止める。山南は、強張った顔をこちらに向けてきた。

「あんたが俺のことをどう思おうが知ったことじゃない。いくら命を狙って来ようが構わねえ。だが、来るなら、あんたが直接来い。今日の三人のように、何も知らない人間を送って寄こすな。何も知らずに、俺のような化け物と戦わされたんじゃ、哀れだ」

山南の唇が青い。全身が小さく震えている。そのまま何も言わず、山南は屋敷の奥に姿を消した。

左之助は、小さくため息をつく。

外が暗くなり始めていた。あの三人の死体は、もう見つかっただろうか。そんなことを思った。

## 第四話

左之助が土蔵から出ると、縁側を歩いている山南の姿が見えた。向こうも、左之助の姿を認める。すぐに目をそらすと、早足で自分の居室の方へ去っていった。

あの一件から、一年近くが経過していた。その間に、壬生浪士組も新撰組と名を改めている。左之助にとっては、どうでもいいことだったが。

この一年、山南が左之助の命を狙ってきたことはなかった。もちろん関係が改善したわけではない。今の光景を見ても分かる通り、山南は徹底的に左之助を避けていた。最近では、病氣と称して自室にこもっていることが多い。噂では、何でも大量の本を読んでいるという。医書、武芸書、果ては妖術書の類まで。

そこまで俺を殺したいか。

左之助は怒るよりも、むしろ面白がっていた。好意すら抱いていた。目的はどうあれ、自分のことにこれほど一生懸命になってくれると、好悪の念を超越し、嬉しくなってしまう。悪癖だと自覚はしているが、治そうと思って治るものではない。そもそも、治す気もなかった。

左之助は縁側に腰を下ろす。小指で、耳の穴をほじった。まだ、悲鳴が耳の奥にこびりついている。

先ほど出てきた土蔵を見やった。今、あの中では拷問が行なわれている。拷問を受けているのは、枳屋喜右衛門。本名を古高俊太郎という尊攘派の大物である。主に、京における間諜の差配と、武器弾薬の調達にあたっており、そのかどで新撰組に捕縛された。現在、古高を拷問しているのは、「京都大火」の詳細な計画を聞き出すためだ。

「京都大火」。京の町に放火し、その混乱に乗じて、天皇を拉致しようという計画である。尊攘派がそのような計画を立てていると

いう噂は、以前から流れていた。それまで風評に過ぎなかったものが、榊屋の土蔵から大量の武器が見つかったことにより、俄然、現実味を帯びてきたのである。拷問により、すでに計画の大部分は吐かせていたが、決行の際、浪士たちがどこに集結するかだけは、まだ聞き出せていなかった。その点についてだけは、古高はどうしても口を割らない。あるいは、本当に知らないのかもしれない。京都大火の決行日は六月五日。すでに二日後に迫っている。

永倉が、土蔵から出てきた。

「どうだい、吐いたか？」

永倉は首を横に振る。青い顔をしていた。無言のまま、左之助の横に座る。

「左之助」

「なんだい」

「お前は……平気なのか」

「拷問のことか？」

全く平気、というわけではない。だが、永倉ほど気に病んでもいなかった。上からの命令、ということで割り切っている部分もある。「京の治安を護るのが俺たちの仕事だ。そのためには古高の持っている情報を全て引き出す必要がある。なら、仕方ねえだろうぜ」

「分かっている、そんなことは。分かっている、つもりだ」

それでも納得はできない。永倉の気性から考えれば、無理もない。駄目だな、古高は」

いつの間にか、土方が土蔵から出てきていた。

「すでに心の方が死んでいる。これ以上、情報を引き出すのは無理だ」

「じゃあ、どうするよ、副長」

「監察方に探らせるしかあるまい。大体の目星をつけてから、虱潰しに当たる」

左之助は曖昧に肩をすくめた。

永倉は、黙り込んでいる。まだ、拷問の是非について考えている

のだろう。そういう永倉が、左之助は嫌いではなかった。

池田屋で近藤隊が尊攘派の浪士たちと戦っている。

その報が土方隊にもたらされたのは、ちょうど四国屋を調べている最中だった。

結局、古高は浪士たちの終結場所について口を割らなかった。そのため、近藤は隊を二つに分け、一方の指揮を土方に任せたのである。近藤隊は沖田、永倉、藤堂を含む十名。土方隊は井上、斉藤を含む二十四名。左之助は土方隊に属することになった。

そうして、近藤隊は木屋町通りを、土方隊は縄手通りを北に向かって、軒を連ねる旅籠や料亭を順番に調べていった。探索を開始して二刻（約四時間）ほど。そこで、土方隊に池田屋の急報が入ったのである。土方は隊をまとめ、急ぎ、池田屋に向かった。むろん、左之助もそれに従う。

四国屋から池田屋まで、それほど距離はない。さほどの時を経ることなく、池田屋に着いた。池田屋は血臭にあふれていた。中に入らずとも、据えた鉄さびの臭いが漂ってくる。

「原田は外を固める」

土方はそう言っ、数人を残し、屋内に駆け込んでいった。悲鳴、怒号、剣戟の音が一段と大きくなる。

中から、数人の人影が飛び出してきた。味方ではない。瞬時に、そう判断すると、左之助は立て続けに槍で突いた。声もなく、敵は倒れ伏した。

ふう、と左之助は大きく息をつく。と、視界の端に映った人影がある。その人影は、路地裏に入っていた。

「すまねえ。ちょっと、ここは任すぜ」

そう言っ、左之助は人影を追、路地裏に入った。

「風邪じゃなかったんですかい？」

人影は山南だった。思いつめたような表情で、左之助を見つめている。

「悩んだよ」

かすれた声で、言う。

「どうすべきか。悩んで、悩み抜いた。それで出した結論が……これだ」

山南は刀を抜き、左之助に向けて正眼に構えた。

左之助は、小さく肩をすくめる。

「そんなに、俺が憎いですか」

「憎い憎くないの問題ではない。好悪で言えば、私は君が好きだ。だが、それでも、私は君を斬らねばならない。君の存在は、この世に生きる全ての命に対する冒瀆ぼうとくだ」

山南らしい。潔癖主義、とても言うのか。全てを自らの哲学に当てはめ、そこから外れるものを決して認めようとしない。

「俺を殺そうとしても無駄ですよ」

「分かっている。だが、こうするしかないのだ」

左之助の口元に微笑が浮かぶ。

「おしゃべりは、もういいだろう」

山南の目が殺意に濡れた。

「構えたまえ、原田君」

ゆっくりと、左之助は槍を構えた。しばしの対峙。お互いの気が膨れ上がっていく。しかし、左之助の心はどこか冷めていた。左之助が死なない、死ねない以上、すでに勝敗は決している。

山南の刀の切っ先が揺れ出した。来る。

そう思った瞬間。

「何をしている！」

飛び込んできた声がある。声のした方を見ると、永倉がそこに立っていた。頭から足の先まで真っ赤に染まっている。浪士たちを斬った返り血だろう。自身の血だとすれば、致命である。

「左之助。いつたい、これは」

「いや、なに。山南さんが病を押して駆けつけて来てくれたんだが、俺が敵と間違えてしまったのさ。ねえ、山南さん？」

山南は答えない。無言のまま、左之助に背を向け、歩み去っていった。

「左之助、山南さんと何かあったのか」

「何も。俺が敵と間違えたんで、気分を害したんだろうぜ」

永倉の表情に納得の色はない。それに気付かぬふりで、左之助は池田屋の方へ歩き出した。すでに、争鬭の音は鳴りやみ、痛いほどの静寂が辺りを支配している。

山南が脱走したのは元治二年（一八六五年）二月、池田屋の一件から半年以上が過ぎていた。

山南の脱走に一番早く気付いたのは、左之助だった。書き置きがあったのだ。いや、むしろ果たし状と言うべきか。書面には、大津の宿場にて待つ、とだけあった。

左之助は応じなかった。応じず、その書き置きを近藤らに見せた。近藤らは大いに驚き、根掘り葉掘り質問してきたが、左之助はのりくらくりとやり過ごした。

結局、追手を差し向け、書き置き通り大津にいた山南を捕えた。ほとんど抵抗はしなかったという。屯所に護送されてきた山南は、左之助の姿を認めると、燃えるような目でにらんできた。

すまねえな、山南さん。

心中で、左之助はつぶやく。

だけど、勝つと分かっている果たし合いに何食わぬ顔して行けるほど、俺は厚顔無恥じゃねえんだ。

その日のうちに、山南は切腹した。

戸板に乗せられ、運ばれていく山南の遺骸を、左之助は無表情に見つめていた。

すまねえな。

もう一度、心中につぶやいた。

翌日、山南の死体が消えた。

## 休載のお知らせ

ちょっと直しを入れたいところが見つかったので、本日は休載します。

大変、申し訳ありません。

次回更新は、十一月二十二日（月）の予定です。

以下、文字数稼ぎのための記号。

## 第五話

左之助は困っていた。女のことだ。まさ、という商家の娘である。彼女に、惚れられた。ごろつきに絡まれているところを、助けたのである。

まさが嫌い、というわけではない。むしろ逆で、左之助も彼女に慕情を抱いていた。絶世の美女というわけではないが、整った顔立ちで、女性にしてはかなり大柄である。細かいことを気にしない、さばさばとした性格で、そのあたりも左之助の好みだった。お互いの気持ちは通じ合っている。左之助さえその気になれば、夫婦めおとになるのはさして難しいことではない。

左之助をためらわせているのは、むろん己が身体のことである。死なない、死ねない身体を持った自分。そんな自分が、人並みに妻帯などしていいものか。

いっそ、まさに全てを打ち明けてしまおうか、と思ったのも一再ではない。が、できなかった。もし打ち明けて、嫌悪や恐怖の表情を浮かべられたら、と思うと、どうしても意気がくじける。

そんな忸怩たる思いを抱えながらも、左之助はまさのもとへ日参した。それだけ、左之助のまさへの慕情は抜き差しなくなっていたのである。

そんな、ある日のこと。

まさの家を訪ねてみると、家人が誰もおらず、まさが一人でした。「お尋ねしたいことがあります」

いきなり、まさはそう切り出した。

「左之助様は、私のことがお嫌いですか」

左之助は言葉に詰まった。まさは、待っている。

「嫌い、というわけではないが……その」

「私は、貴方が好きです」

へどもどとした左之助とは対照的に、まさはきっぱりと言い切っ

た。

「好いているゆえ、申し上げます。もし、私と夫婦になるつもりがなければ、もうここに来るのはおやめくださいまし」

「う……む……」

「いかが？」

ええいままよ、と左之助は懷中から小刀を取り出した。ここまで思いつめられては、話さぬわけにいかぬ。話して、忌み嫌われるようになるならば、あきらめもつく。左之助は半ば自棄<sup>やけ</sup>になっていた。「見ている」

そう言つて、左之助は小刀で自分の腕を突き刺した。血が流れ出す。すぐに、血は止まった。傷口が塞がっていくのを、まさは目を丸くして見つめていた。

左之助は、まさの手を取り、山南の時と同じく、懷中に導いた。まさも、すぐに、鼓動がないということに気付いたようだ。

左之助はまさから顔をそむけた。山南と同じように、恐怖と嫌悪が彼女の顔に浮かんでいると思うと、とても、直視できなかった。

「俺は、この通りの化け物だ。だから」

「だから……何だと言つのです」

まさが、静かな、しかし力のこもった声音で言つた。

思わず、左之助はまさの方に視線を戻した。その顔に浮かんでいたのは、恐怖でも嫌悪でもなく——怒り。

「傷がすぐに治ろうが、鼓動がなかるうが。私が貴方を好きだという気持ちに変わりはありません。むしろ、私の気持ちがそんな脆弱なものと思われていたことが悲しいです」

「し、しかし、まさ殿」

「私はあなたの心根に惚れたのです。それとも、左之助様は、心まで化け物なのですか」

「そ、それは違う。違うが、しかし……」

左之助はうろたえていた。うろたえる以外に、どうしろと言つのだ。まさか、「死に損ね」の自分を受け入れてくれる人間がいると

は、露ほどにも思わなかったのだ。

「あらためて問います。私を、貴方の妻にしていただけませんか」  
まさの双眸が左之助を射抜いた。それに気圧されるように、左之助は後退り――逃げ出した。どんな強敵にも背を向けたことのない男が、自分より年下の娘を前に遁走した。なぜ逃げ出したのか、左之助自身にも分からない。ただ、怖かった。拒絶されることには慣れている。受け入れられたのは、初めてだった。拒絶される覚悟はあっても、受け入れられる勇氣はなかった。

それから数日、左之助は憂悶の時を過ごした。自分の體質を受け入れられたのは初めての経験で、どうすればいいのか見当もつかなかった。

まさはすでに答えを出している。あとは、左之助の決断如何だ。  
むろん、許されるならば、まさと添い遂げたい。しかし、自分のような化け物が、そんな人並みの幸せを得ていいのか。

悩み抜いた。

人生においてここまで悩んだのは、左之助にとって初めての経験だったと言っている。頬はこけ、目の下にはどす黒い隈ができた。

「いったい、どうしたんだ、左之助」

部屋にこもりきりの左之助を、永倉が見舞いに來た。

「何を悩んでいる。もしかして、まさ殿のことか？」

左之助とまさの関係は、隊内では周知だった。

「なあ、新八」

「なんだ」

「俺は、まさ殿を幸せにできるだろうか」

そう言つと、永倉がくすりと笑った。

「何を笑う」

「いやなに、お前らしくもない、と思つてな」

「からかうな。こちとら真剣なんだ」

「からかつちやいない。左之助、お前は心得違いをしているぞ」

左之助が訝しげな視線を向けると、永倉は、

「人は誰かに幸せにしてもらうんじゃない。自分で幸せになるんだ。お前がまさ殿を幸せにするんじゃない、まさ殿がお前と夫婦になり、幸せになるのさ」

左之助は無言で考え込む。

「お前はどうかんだ。まさ殿と夫婦になれば、幸せになれるのか」

「そいつは……」

言うまでもない。

「ならば、もう答えは出ているだろう」

左之助はしばし考え込み、やがて決然と顔を上げた。永倉に小さくうなずいてみせる。

その日のうちに、左之助は正装し、まさに自分の想いを伝えに行った。

こうして、左之助は妻帯した。驚いたことに、子までできた。男児である。もしかすると、子も「死に損ね」になるのではないかと危惧していたが、確かめると、ちゃんと鼓動があつた。茂、と名付けた。

幸福だった。

そんな生活が、約二年半、新撰組が京を離れるまで続いた。

まさと最後に交わした言葉を、左之助は生涯、忘れる事はなかった。

まさは、こう言った。

「お前さま。ありがとうございました。私は、あなたに会えて、あなたと添えて幸せでしたよ」

## 第六話

新撰組が京を離れたのは慶応四年（一八六八年）。敗走、であった。

この年の一月に、幕軍と薩長（官軍）との戦争が勃発。後世、鳥羽伏見の戦いと呼ばれる、この戦争に幕軍は敗北した。幕府側として参戦した新撰組も多くの戦死者を出し、生き残った者たちは、海路、江戸へ引き上げた。

当然ながら、左之助は生きていた。永倉も生きている。

江戸に帰った新撰組は、甲陽鎮撫隊と名を改め、甲府へ出陣するも、官軍に敗北、江戸へと引き上げざるをえなかった。これを機に、隊を離れる者が増え始める。それを危ぶんだ永倉は、近藤に会津行きを進言した。これに対し、近藤はすっかり意気消沈した様子で首を振るばかり。業を煮やした永倉は、一言。

「近藤勇、同胞として志をとみにするに値せず」

そう言つて、一度も振り返ることなく立ち去った。

「原田君、君はどうするね」

「俺ですか？」

耳の穴をほじりながら、二人のやり取りを眺めていた左之助は、いきなり話を振られ、少々あわてた。左之助としては、今後どうするか、などということは上の者、この場合は近藤だが、彼が決めればいいことであり、自分が判断することではないと思っていたのだ。

「近藤さんの言う通りにしますよ」

「君の好きにしたまえ」

困ったな、と左之助は思った。今までは、何も考えず、ただ槍を振るっていれば良かったのが、今後はそうもいかないらしい。すでに、近藤は上に立つ意思をなくしている。もしかすると、死ぬ気なのかもしれない。

「分かりました」

左之助はうなずき、

「俺も隊を離れることにします。今までお世話になりました」

近藤もうなずく。

左之助は一礼すると、近藤に背を向け、永倉の後を追った。

近藤が官軍に投降し、板橋の刑場で斬首されたという話を聞いたのは、約一ヶ月後のことだった。

左之助は永倉とともに、靖兵隊という組織を作り、江戸を発した。目的地は会津である。すでに江戸城は新政府軍に明け渡されており、旧幕府勢力の核となっているのは実質的にも象徴的にも会津藩であった。

「なあ、おじちゃん。原田左之助って人を知らない？」

左之助が、その声をかけられたのは山崎宿のことだった。すでに日が沈み、辺りは暗くなっている。声をかけてきたのは、十歳になるかならないかの男の子だった。手に、一枚の紙を握っている。

「俺が左之助だが。何か用か」

「ん」

左之助が名乗ると、男の子は手にした紙を差し出してきた。

「さつき、男の人に頼まれたんだ。これを渡してくれ、って」

左之助は、紙を受け取った。どうやら手紙らしい。字面に目を通す。

一瞬、頭が真っ白になった。

「どうした、左之助」

永倉の声に、我に返る。いつの間にか、男の子はいなくなっていた。

「すまん、新八。用事ができた」

「用事？」

「ああ、これから江戸に戻らにやらねえ」

「江戸だと？ 何を言っているんだ。いま戻れば、捕まえてくれと

言っているようなものだぞ」

「それでも、だ。これ以上、何も聞いてくれるな」

左之助が真剣な目をして言うと、永倉は黙り込んだ。しばしの沈黙の後、口を開く。

「帰ってこれるのか」

「ああ、心配するな。すぐに後を追う」

「そうか」

永倉が空を見上げた。満天の星。明日は快晴だろう。

「左之助」

星を見上げたまま、永倉が言う。

「その身体に関係することか」

## 最終話

一瞬、左之助は言葉を失った。

「な、」

なんとか言葉を絞り出す。

「なぜそれを」

「俺を見くびるなよ、左之助。親友の悩みともに気付けぬほど、鈍感じゃない。それに、これまで、どれだけ共に死線をくぐり抜けてきたと思っっている。気付かぬ方が、どうかしてるさ」

左之助は、うつむいた。

「恐くはないのか、俺が」

「恐い？」

「化け物なのだぞ、どんなに斬られても死ぬことがない」

左之助の言葉に、永倉は苦笑を浮かべた。

「言っただろう、あまり俺を見くびるな。たしかに、最初は驚いた。悩みもした。だが、それでも」

永倉は強い光を湛えた眼差しを、左之助に向ける。剣。剣を手にした時の目だ。

「それでも、お前が俺の親友であることは変わらない」

左之助はうつむいたまま。その肩を、ぽん、と永倉が叩いた。

「じゃあ、ここでお別れだ。必ず、帰ってこいよ」

そう言っ、永倉は背を向けた。その背が、ゆっくり遠ざかっていく。

「新八」

知らず、左之助は呼びかけていた。永倉が足を止め、振り返る。

「どうした」

永倉の問いかけに、左之助は応えない。応えられない。今、感じているこの気持ちは、言葉にすればひどく陳腐になってしまう気がした。

無言のまま、左之助は小さくうなずいた。永倉がうなずき返してくる。

左之助は永倉に背を向け、歩き出した。後ろは振り返らなかった。

手紙の主は、江戸への街道沿いから少し外れた森の中を、対決の場として指定していた。枝に結ばれた白い布。それを目印に、左之助は木立ちの中へ踏み入った。少し歩くと、開けた場所に出た。

そこに、いた。

「山南さんか？」

思わず、左之助はそう問うた。問うてしまうほど、山南の面貌めんぼうは変わっていた。もともと痩身だったものが、今では骨と皮だけ、と言っても過言ではないほどに細くなっている。頬もこけ、顔全体がしぼんだように見えた。そんな中、目だけが別の生き物のように、ぎよろりと飛び出している。その目が、左之助をとらえた。

「今度は来てくれたね」

「来ざるをえんでしょう、同じ『死に損ね』からの呼び出しとあっちゃ」

『死に損ね』か。言い得て妙だな、と山南が苦笑気味につぶやく。予想はしていた。山南の死体が消えた、と聞いた時に、もしかすると、という思いはあったのだ。

「それに……」

左之助は、山南の背後に目をやった。

まさ。

手足を縛られ、地面に転がされている。猿ぐつわをかまされているのか、かすかにうめき声が聞こえてくるだけだ。

「最愛の妻を人質に取られちゃあね」

左之助は軽い口調で、肩をすくめた。目は笑っていない。

「細君を巻き込んだのは、すまないと思っている」

言葉とは裏腹に、山南は凄絶な笑みを浮かべた。

「だが、もしまた呼び出しにに応じてもらえなければ、たまったものではないからね」

左之助は舌打ちし、

「なら、もう妻に用はないでしょう。解放してはくれませんか」

「逃げないと誓ってくれるかい？」

「誓いましょう、いくらでも」

左之助が言うと、山南の右手が素早く動いた。

一瞬の後、まさの手足を縛っていた縄が斬り落とされている。

凄まじい剣技。以前より、数段、腕が上がっている。

「まさ、こつちに来い」

まさは立ち上がると、左之助に走り寄った。

「怪我はないか」

まさはかぶりを振る。顔が多少青ざめている他は、特に変わった様子もない。

左之助は、小さく息をついた。

「さあ、始めようか」

山南が構えを取る。

左之助が、まさを突き飛ばすのと、山南が踏み込んでくるのが同時だった。

白刃がきらめく。反射的に、左之助は半身を引いて、それをかわした。剣先がわずかに、左肩をかすめる。血煙が、夜の闇に黒く舞った。

間合いを取り、左之助は冷めた目で山南を見つめた。

「無駄だよ、山南さん。俺たちは……」

その時、異変に気付いた。血が、止まらない。傷がふさがらないのだ。

「やはり」

山南が得心したように、うなづく。左之助は呆然と、ふさがらない傷口を見つめていた。

「『死に損ね』は、この世の理ことわりから外れた存在。それゆえ、この世

に生きる者には殺すことはできない。だが、同じ『死に損ね』ならば」

殺せる、のか。

にわかには信じがたかった。だが、傷がふさがらないのだ。

「いくぞ」

山南が再び踏み込んでくる。喉笛に伸びてきた刀の切っ先を、ころうじてかわす。刃風が頬をかすめ、痛みを伴った黒色の赤が視界の端を染めた。その傷口もふさがらない。

「お前さま！」

「来るな！」

走り寄ってこようとしたまさを、左之助は鋭い声で制止した。

「ここから離れている」

「で、でも……」

「足手まといだ、早く！」

たしかに、自分がいては足手まといだと思ったのか、まさは後ろ髪を引かれるような表情をしながらも、

「ひ、人を呼んできます」

そう言つて、小走りに林から出て行つた。

山南が苦笑めいた表情を浮かべる。

「ひどいことを言うね」

「ああでも言わないと、妻は納得しませんからね」

左之助は、大きく後方に跳躍し、山南との間合いを取った。腰を低くし、槍を構える。

膠着。左之助も山南も動かない。お互いの気が潮のように満ちては引く。虫の声すらしない。木々の間から漏れてくる月明りを、山南の刀と左之助の槍が淡く照り返している。

「なあ、山南さん」

唇だけを動かし、左之助が言う。

「幸せになっちゃいけないのか、俺たちは」

山南は無言。

「幸せを求めちゃいけないのかよ」

やはり、山南は無言のまま、殺意に目を濁らせている。ただ、一瞬、その目に走ったのは、悲しみだろうか諦念ていねんだろうか。

「言っただろう、君は」

言い差して、山南はゆるゆると首を振った。

「私たちは、この世に存在してはいけない」

左之助は、無性に悲しくなった。以前は、自分も今の山南と同じような目をしていたに違いない。だが自分には二人いた。山南には一人もいなかったのだろう。

山南が動いた。

そう感じた時には、左之助も動いていた。槍の穂先から何かを貫く感触が伝わってくる。同時、右肩から腹にかけて、熱い感触が通り抜けていった。

急に視界が狭まった。明滅を繰り返しつつ、少しずつ暗くなっていく。山南はどうなったのか。視線を巡らすが、もう目がよく見えない。

左之助は、その場に倒れこんだ。

まさのことを思い出した。永倉のことを思い浮かべた。彼らと交わした言葉、その一つ一つが脳裏に去来する。それだけで心が温かくなる。忍び寄る闇の寒さに、耐えることができる。

「ありがとうよ」

左之助は、かすかに笑みを浮かべ、つぶやいた。

俺の人生もまんざらじゃなかった。

そう思った。

(了)

## 最終話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

これにて『死に損ね』、完結でございます。

お付き合いくださった方、ありがとうございました。

少しでも楽しんでいただけたのなら、これに勝る喜びはありません。  
それでは皆様、また次作で。

律子さん、毎回の拍手コメありがとうございました。励みになりました。この場を借りて御礼申し上げます。

二〇一〇年 十二月六日

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3859o/>

---

死に損ね

2010年12月7日12時55分発行